

さる日、事務局長の平井さんから1通の葉書をいただいた。これが、とんでもない葉書だった。——酔筆(9)『自分の顔と自分の画』を読んでいて……「新井流の絵画技法を知りたい」……悠遊会のメンバーには、古参がおり、新参がおります。皆が求めているものは「よい絵」であり、「よい絵」を描くための技法です。新井さんは、現場で描かれたスケッチを10数枚コピーされるそうですが、その技法、心境を知りたいものです。宮本さんも原画を複写されます。手数を少なくするのがコツだ、と教わりました。」——

平井さんに返事を書きながら、つぎつぎに着想が出てきて葉書には収まりきれなくなった。このとき、そうだ、平井さんへの返事を丁寧に書いて『酔筆』(10)の原稿にしようと思いついた。

酔筆だから、飲みながら書く。すでに、発泡酒350ccの後ジョニ黒のダブル2杯目である。ジョニ黒は美味しい。美味くて酔い心地がいい。しかも、かなり飲んでもあくる日まったく頭にこない。これを証明したのが今回の個展であった。私は1週間飲みつづけた。千客万来で実に楽しかった。昔のパリのサロンは、そうであったそうだ。古木屋の親父ではないのだから、渋茶をのんで客とは何の会話も無い、というような1週間は想像が出来ない。以下、勝手放題なことを書く。

個展を開き、毎回値段をつけて売る以上、たとえ1号1万円であろうと2万円であろうと、考えて見ればこれは正しくプロのすることである。本物のプロは売れた画で生計を立てる。売るのはない。売れるのである。高値で売れるのである。ここが、かけだしのプロとは違う。さらに本物のプロは生前は売れなくて死後売れるものだ。昨年の正月になくなったが、宮地亨さんという画家がいた。日本人では初めて、30年ほど前パリの秋のサロン・ドートンヌでベルナール・ピュッフェと共に金賞を得た人である。その後日本人で金賞を獲った人はいない。梅原も安井も、ましてや平山郁夫なんかも秋のドートンヌでは金賞をとっていない。画商もマスコミも書かないのは商売に差支えるからだ。(ちよつと酔いが回りすぎたので中断)………寝室へ行って万年床の上で「真向法体操」を15分間ほどやって来た。私が40年ほど続けてきた体操である。少なくとも、10年は老化のスピードを遅くする体操であり酒も美味しくなる体操である。この宮地さんから「こりゃ駄目だ！写真を前において描いただろ。長崎港という本物と君の眼という本物の間に写真という偽物を挿んでいる。だから画が偽物になった。現場で描け。写真はあくまで参考資料だよ。絵だけでは思いだせない物がたまにあるからな。それを、この画は写真だけ見て描いている。偽者だよ」と言って私の描いた長崎港の淡彩をコテンパンにやっつけた。………

さて、「新井流の絵画技法を知りたい」という平井さんの御葉書から始まった酔筆だったが、よく読むと、その「心境」についても話せということである。心境の方は後回しにさせてもらって、技法について書く。

描く対象は、大雑把に括って風景、静物、人物になると思うが、風景について述べる。風景の場合二つに別けられる。AとBにすると、AはP-6～P-8の画紙に、すくなくとも60分かけて描く場合である。更にA-1はデッサン+彩色であり、A-2はデッサンのみの場合である。

Bは1～2号のスケッチ・ブックに短時間に描く場合である。2時間に1冊くらいか。20～30枚を描く。忙しい旅の場合とか、病院の帰りとか、散歩の時とか、椅子を使うこともあるが大体は立ったままで描く。デッサンだけで終る。1枚、2～5分か。建物の場合は20～30分か。捲かれた前の絵の裏側に色彩をメモする。彩色はホテルの部屋、食堂、喫茶店、駅の待合室、自宅、ベンチなど何処でもいい。——ここで風呂……さて冷蔵庫を開けてビールを取り出した。湯上りのビールは美味しい。「喉とほるビールの味の尊けれこの味知るに八十二年」(1998年作)である。AとBの詳細は次号に書く。

(つづく)